

# 大学生の友人関係の特徴と友人関係ストレス、学校不適応感との関連

## The relationship among college students friendship, friendship stress, and school maladjustment feeling

石川 愛海 (Ami Ishikawa) 指導：鈴木 伸一

### 問題と目的

大学生が友人関係のストレスを抱え、学校での適応感が減少することによって長期的には留年、休学、退学、学校不適応や準ひきこもりなど学校場面でのさまざまな適応に関連する問題が引き起こされる可能性が考えられる。大学生におけるメンタルヘルス不調に友人関係が関連していること、良好な友人関係の形成が友人関係のストレスを抱えた際の心理反応を緩和させることから、大学生にとって良好な友人関係を築くことは、心理社会的適応を高め、学校適応にも影響を与えると考えられる。また、友人関係の問題による学校不適応感を高める要因として、友人関係のとり方の理想と現実のズレが挙げられる。友人関係において求める理想が、現実では出来ていないと苦痛を感じる度合いが強い場合、その友人関係においては安心感や信頼感を持つことができず、友人関係の満足感が低くなることが分かっている (吉岡, 2001)。以上のことから、本研究では、現在の友人関係のとり方と友人関係ストレス、友人関係の理想と現実のズレに焦点をあてて、学校不適応感と関連する要因について検討することを目的とした。このことにより、学校不適応感を抱えやすい友人関係の特徴を明らかにし、大学生の学校生活での適応を高める予防的関与の提供、友人関係の構築と維持に関して寄与できると考える。

### 方法

**調査対象者：**2015 年 7 月時点で関東地方に所在する私立大学に在籍していた18歳以上の33名 (20.03±0.85歳)。

**調査手続き：**対象者に研究の趣旨を書面にて説明し、同意が得られた者に対して自己記入式の質問紙を実施した。

**調査材料：**①フェイスシート：年齢、性別

②友人関係の特徴：大学内での友人関係で最も重要な存在である親しい友人1人を想定し、学業（クラス）、サークル・部活動、ゼミ・研究室、その他のどれかを選択するよう求めた。

②-1 友人関係親密度：友人関係認知尺度（菊地・生月・山口・原野, 1990）を用いた。

②-2 現実・理想の友人関係のとり方：友人関係尺度（岡田, 1995, 1999）を用いて、現実と理想の友人関係について

回答を得た。「自己閉鎖」、「軽躁的關係」、「侵入回避」、「傷つけられ回避」の下位項目から成る。

②-3 友人関係の理想と現実のズレの評価項目：友人関係の理想と現実のズレの知覚、ズレに対する苦痛度から成る。

③友人関係における葛藤・ストレス：対人ストレスイベント尺度（橋本, 1997）を元に作成した友人ストレスイベント尺度を用いた。「友人葛藤事態」、「友人劣等事態」、「友人磨耗事態」の下位項目から成る。

④学校適応：大学環境への適応感尺度（大久保・青柳, 2003）を用いた。「居心地の良さの感覚」、「被信頼感・受容感」、「課題・目的的存在」、「拒絶感の無さ」の下位項目から成る。

**倫理的配慮：**本研究は早稲田大学人間科学学術院「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て実施された（承認番号: 2015-055）。

### 結果と考察

学校適応感と関連する要因について検討するために、友人関係親密度、現実の友人関係のとり方、友人関係ストレス、現実と理想の友人関係のとり方の差得点、ズレの評価項目と学校適応感についてPearsonの積率相関係数を算出した。その結果、友人関係親密度、現実の友人関係のとり方の傷つけられ回避、友人関係ストレスの友人劣等、友人関係の理想と現実のズレの知覚、苦痛度が学校適応に関連していることが示された。

また、友人関係親密度、現実の友人関係のとり方、友人関係ストレス、友人関係のとり方の理想と現実のズレが学校適応感に及ぼす影響について検討するために、階層的重回帰分析を行った。しかし、友人関係の理想と現実のズレの知覚、苦痛度を追加することによって有意に説明率が高くなることは示されたが、その他の友人関係の特徴に比べて影響性が高いことは示されなかった。以上のことから、友人関係の理想と現実のズレは学校適応と関連性は示されたが、本研究の全対象者があまり友人関係の理想と現実のズレを感じていない可能性や、ズレを知覚し、苦痛に感じていても、その程度が高すぎない場合は、全体的な学校適応を低める大きな要因ではない可能性が考えられる。